

「牡丹花千首」について

井 上 宗 雄

「牡丹花千首」などと題して伝存する千首和歌がある。春二百首、夏百首、秋二百首、冬百首、恋二百首、雑二百首という構成で、歌人であり、古典学者であり、とりわけ連歌師として著名な牡丹花肖柏のものと見なされている。従来ほとんど取上げられていないようなので、主として基礎的な面についての考察を試みたい。

一

まずその伝本を掲出する。なお「」に入れたのは後文で用いる略称である。

詠千首和歌 宮城県図書館伊達文庫（伊九一・二五六・二五）
写 一冊 [伊]

牡丹花千首 水府明德会彰考館（巳・一五） 写 一冊 [彰]
詠千首和歌 国立公文書館内閣文庫（二〇一・四八四） 写 二冊

冊（宋雅千首と並記） [内]
宋雅肖柏千首 宮内庁書陵部（五〇一・八五六） 写 一冊
（宋雅千首と並記） [書甲]

牡丹花千首 同右（二六五・一〇五七） 日野輝資写 一冊

（為家千首・宗良親王千首等と合綴） [書乙]
千首 高岡市立中央図書館（九一一・一・一八） 写（新編和歌叢書1の内。宋雅千首と並記） [高]
詠千首和歌 三手文庫（歌・以） 写 二冊（宋雅千首と並記） [三]

宋雅肖柏千首 龍谷大学図書館（九二一・二五・四四） 写 一冊（宋雅千首と並記） [龍]

牡丹花千首 柿衛文庫（五四八八） 写 一冊 [柿甲]
千首和歌 同右（二九六） 写 一冊 [柿乙]

詠千首和歌 天理図書館（九一一・二六・七三） 写（千首類聚和歌）の内、宗彰・吉保の各千首と合綴 [天]

宋雅牡丹花詠千首和歌 佐賀県立図書館（鶴九九一・二・二一九） 二冊 写（宋雅千首と並記） [佐]

牡丹花千首 島原市立図書館松平文庫（一四〇・一六） 写 二冊（宋雅千首と並記。「尚舍源忠房」印あり） [島]

牡丹花家集 三冊 版（元禄四年奥書） 大阪市立大学森文庫・大阪府立図書館・柿衛文庫・刈谷市立図書館・九大・京大

・林田良平・神宮文庫・天理図書館・祐徳文庫・陽明文庫等²

右の外、谷山茂蔵「続百首和歌十二」に肖柏の「詠百首和歌」が収められている（未精査であるが、千首の抄出か。但し牡丹花筆を以て写すという注意すべき奥書がある）。

また右の書名は多く外題に依った（題の下の作者名は略した）。多くは江戸期の写本で、それも初期の末から中期のものが多い。

宋雅千首と並記、と記したのは左の如き形式のものである。内閣本の冒頭二首を記す。

詠千首和哥 上 宗雅 牡丹花

春二百首

立春朝

天の戸のあけゆくほとんやすらひに日影をまちて春やきぬら

ん

このねぬる一よあくれば三冬つき春きにけらし空のよとけさ

々々天

いまのまにみとりの空のかすむらん春たちきぬる空の通路

かきりなき春のみとりにすみのかけ今朝染いたす天津空かな

同題の前歌が宋雅の、後歌が牡丹花のものである。以下この形で

終りまで続いている（合綴とはいえないので、便宜上、二首並記と称

する）。それ以外は、後歌のみ一首が題の下に書かれている（以下、

一首本と称する）。なお、例えば宗彰の千首と合綴、のように記し

たものは、それぞれの千首が独立して記されているものである。

〔書乙〕〔天〕は牡丹花千首に關していえば一首本になる。また内

題（端作り）は、〔書甲〕にはなく、〔版〕は、「牡丹花家集」、他

は、二首並記本は上掲の形が多く、一首本は「詠千首和歌 牡丹花」である。

伝本の中には奥書を有するものがある。

まず〔書甲〕のそれを掲げる。

本文の最後の歌（ある亀の）から約四行置いて、小ぶりな字で、

延宝二年三月廿三日一校了 二三〇〇字有之

とあるが、本奥書と思われる。余白のままその丁の裏に次の如く記されている。

和哥の浦に玉もましらぬもしほ草古今のかすをとめぬる

本云

此千首可進詠由去八月廿四日自室町殿蒙仰同十月八日持参之

応永廿二年十月 月

向寄窓屢招早涼為尹卿以自筆本書写之件雖三帖今一帖用

之

文明元年初秋撰 羽林郎将藤原為広

此奥書ノアルハ為尹ノナリ以木阿本写之

大永七年丁亥十一月十四日

九州肥後住人水俣瑞光写之

（この面の左端に）

文禄五年閏七月十八日 書写之

右の奥書があるのは〔内〕〔高〕〔三〕であるが（なお文中小異はある。例えば〔三〕は「文明元年初秋撰」とよめる）、私に――を付した箇所は〔書甲〕にのみ存する。そして〔高〕には「大永七年

丁亥十一月十四日」に続き、

無常三首

寄風無常

牡丹花

おもはずや花も紅葉も夢とのみさそひし風の心ふかさを

寄雲無常

さま／＼のかたちみえても跡とめぬ雲にこの世をおもはさら

めや

寄露無常

身のうへも世のはかなさも浅ちふの露よりほかにいかてしまし

右三首牡丹花千首板本ニ出タリ

于時元禄六年癸酉六月廿九日^(つぐ)⑧拭老眼令書写早落字等可有之

以他本可被書入者也

葉門寂峯

宝永二乙酉年遂一校猶落脱有之也

なお右三首は、「高」にない無常三首を、「版」によつて補つた
というのである(なお後述)。因みに、「高」を第一冊に含む「新編
和歌叢書」(四冊)は土御門・順徳・忠度百首ほか多くの歌書を合
冊としたもので、宝永頃の書写奥書ある一筆、第三、四巻には享
保・元文から寛政頃までの筆のものが多い。

〔島〕には以上の奥書がなく、次の文がある。

此千首題和調上下卷宗雅牡丹花詠云々既見本之取初題皆冷泉
為尹卿千首同之今按之飛鳥井雅縁卿法名宋雅云、為尹同時代
也若宋宗兩字誤欵但牡丹花者非為尹宋雅之時代見彼題後世詠
之加筆而為一本欵亦飛鳥井榮雅牡丹花同時也榮字似宗字誤矣
以他本可決定之

〔版〕にも以上すべての奥書はなく、次のようにある。

這集千首倭歌者牡丹花老人所詠也書店某偶得之欲鑿梓行于世

也然袖來問云此集何人所詠乎答以旨又云然則銘乞於卷末彼

老人集依書之応求尔

元禄四年霜月下旬

葉山之隱士山雲子

高辻通雁金町水原屋

中村孫兵衛梓

右は刈谷本に拠つた。

さて、「内」「書甲」等にある「応永廿二年十月 日」の奥書で
あるが、これは為尹千首に存するものである。類従本等の為尹千
首をみても知られるように、「和哥の浦に」の歌を含めて、為尹
が將軍義持の命によつて応永二十二年に詠進した旨を記す奥書で
あることは明らかである。従つて次の文明元年為広(為尹の曾孫)
の奥書も為尹千首にあつたものであらう。次の大永七年十一月の
ものについては不明だが、やはり為尹千首についてであらうか。

因みに木阿は幕府の同朋衆であつたらしく、幾つかの本の伝來に
關係があつた(例えば李花集)。そして「書甲」によると、大永七年
十一月十四日というのは肥後の水俣瑞光がこの書を写した(木阿
本によつてか)ことになる。

所で、二首並記本の初めの歌が宋雅(飛鳥井雅縁)千首であるこ
とは確かである。宋雅千首は三類に分けられ、一類本(龍谷大本
等。続類従にある榮雅千首がこれである)は応永二十七年將軍義
持の不例を北野社に祈つた千首であり、二類本(牡丹花千首合綴本)
の改稿を経て三類本(書陵部本)の完成に至るといふ。而して二類

本の奥に付された為尹千首の奥書は、何らかの事情で誤って添えられたもので、牡丹花千首の成立以後誰かの手で編まれたもの、という（佐藤恒雄『続群書類従 第三十七輯』所収「雅縁卿千首」解説）。

なお記すべき点はあるが、一応諸本の伝存状況については以上で止める。（追記参照）

二

この千首の伝本は、上掲のように、版本を一本として十三本の完本、冬以下の残欠本が一本知られているが、この内「書甲」「内」「三手」「龍」「佐」「島」および「高」が二首並記本である。但し本文を検すると、脱落歌は二首並記本の方が多いが、本文そのものは二首並記本と一首本とどちらが善いか、一概にいえないので、それにとらわれず若干の調査結果を記したい（なお「柿乙」は虫損が激しいので調べられなかった所がある）。

まず欠歌（脱落歌）について、二本以上欠けている歌を列挙する（未翻刻のものなので番号を記す要もないと思うが、参考のため掲げておく。本文は一応「書甲」「柿甲」または「内」などによる。欠けている伝本を略称で列挙した）。

143春・花挿頭 いかにせん春をしめゆふさほ姫のかさしのさく
らうつる世中 「内」「龍」「佐」「島」

344秋・野女郎花 女郎花結ふや野辺の草枕わするなとたに契り
をかはや 「書甲」「書乙」「柿乙」

527冬・篠霜 いさときもことほりならし笹の葉の深山の霜を袖
のかたしき 「書甲」「書乙」「柿乙」

684恋・寄蕙恋 いもに恋おもひあかしつこもまくらたかせのよ

とのかりふしのそら 「内」「龍」「三」「佐」「島」

713恋・寄塩木恋 全伝本歌ナシ（柿甲・天・版は題もなし、他は題あり）

719恋・寄水鶏恋 忍ひかねとふもはかなしいもか門たゞく水鶏
のよひのまかひに 「内」「龍」「三」「佐」「島」

以下の数件は文章化して記す。

792「恋・寄笠恋 乃とてかく伊せおの蟻の浪にひくうけくに身

をも任せつるかな」は「彰」「書乙」にはこのようにあるが、「柿

甲」「天」「版」には「寄浮恋」とあって、この辺、「彰」などと歌

順がやや異っている。そして「伊」「内」「書甲」「高」「柿乙」

「三」「龍」「佐」「島」には歌欠。そして右と連動して、「柿甲」

「天」「版」は恋部の終りの方が他本とやや順が異っているが、終

りから四首目に「寄笠恋 いかてかくふかき恋路に埋らんうへに（柿甲）

かゝれるうおならなくに」がある。

次に雑部90890910は宋雅千首は眺望題である。二首並記本は題の

下に宋雅のそれを記し、二首目を空白にしているが、「彰」「柿甲」

「天」「版」は無常三首を記している。「版」と校合してその結果を

卷末に記したのが上掲「高」である。

かくして歌数からいうと、全伝本に713がなく、また或る特定の

歌数首がなく、その上偶然に一、二首欠けたりして、七、八首から

十首前後不足の本が多い（「書甲」「内」ほか）。歌数の上から

みて傷が少ないと思われるのは「彰」（713がないだけ）、「柿甲」（713

がなく、「寄笠恋 いかてかく」がある）であろう。

本文異同に関しては掲げると際限がないので、二、三記してお

くに止める。

里鶯

40すむ人も春をしれとやうち羽ふきときはの里の鶯のなく

「なく」が〔書甲〕〔書乙〕〔柿甲〕〔天〕〔版〕、「こゑ」が〔彰〕、
他は「声」である。

岸藤

189くれ方の春の河きし行舟の心見えける春のふちかな

末句が〔書甲〕〔書乙〕以外は「ふちのかけ哉」。

〔寄〕〔恋〕
と屋々

668雨そゞき思ひたえてもあつまの軒もる月そ人たのめなる

末句、「人たのめなる」が〔書甲〕〔書乙〕〔柿甲〕〔天〕〔版〕、
「人の為なる」が〔彰〕、他本は「人のためなる」。

石清水

942いはし水やまと嶋ねをおさめこしなかれの末を今かいまて
末句が「今かいまて」は〔書甲〕〔書乙〕、他本は「思はさらめ
や」。

189 942などを見ると、〔書甲〕〔書乙〕は初案で、他本が後案とも
みられなくはない。しかし40や668を見ると、〔書甲〕〔書乙〕〔柿
甲〕〔天〕〔版〕などが本文的に近似関係にあるものと思える。そ
して省略したが、すっかりしない場合も多く、簡単に初案・後案
などでは括れないようである。ただ〔彰〕のように「イ」による
校異の跡があつて、〔彰〕は明らかに〔書甲〕や〔柿甲〕など（或
はそれに近い本）と校合している。

右の外、歌順の相違が全体にわたつて多く、また例えば139が
「花梢」、140が「花枝」だが、「花梢」の下に「此題為尹ノニハ花

ノ枝ノ後ニアリ」のように為尹千首と比較して注記を施した所が
あり〔書甲〕〔書乙〕に多い、本文翻刻の上で総合的に考えるべき
であろうから、以上の程度に止めておく。

従つてまだきちんと系統分けすることは出来ないが、大まか
にいうと、〔柿甲〕〔天〕〔版〕がかなり近いグループを為し、そ
れと対立するものに〔内〕〔三〕〔龍〕〔佐〕〔島〕がある。あとは
その中間ともいえようが、〔書甲〕〔書乙〕は前者にやや近いかも
しれない。〔彰〕も同様にみえるが、本文上明らかに他本との接
触がみられ、それによつて整備された本文の可能性もある。

この千首の恋部は二百首で、すべて寄物題だが、例えば天象に
寄する恋は十五、草に寄する恋は二十というように整然としてお
り、713「寄塩木恋」をもともとなないものとする、木に寄する恋
は十九首という半端な形になる（〔柿甲〕〔版〕は歌も題もないので）。
それを補うように「寄笠恋」（いかでかく）を入れたために、調度
や道具類に寄する恋が五十一首という、これまた半端な数になる。
こういう操作を誰が行つたのか謎である。繰返していうように、
〔柿甲〕は脱落歌もなく、整っているようにみえるが、「いかでか
く」を加えた為に一寸波乱を起しており、一方、歌数では「いか
でかく」がないため一首足りない〔彰〕がすっかりしているが、
しかしこれも他本との接触により整備された気配があり、伝本の
性質については今後考究すべきものである。

三

牡丹花千首の構成の仕方、或はこの組題を持つ千首は必ずしも
珍しいとはいえない。千首和歌には個人と続歌とあり、後者の催

行は鎌倉末以後の家集・撰集類によって窺われるが、その展開については別に考えることとして、ごく簡単に現在作品が残っている個人千首和歌を挙げると次のものがある（室町期まで）。

為家千首 宗良親王千首（天授千首） 耕雲千首（同上）

*長慶天皇千首（同上。抄出本） 師兼千首 *為尹千首

*宋雅千首 別本宋雅千首（為相千首として続類從所収）

正徹千首 *統秋千首 遠忠千首 守武千首

*印を付したものが基本的には同題の千首である。この千首組題の最初のものは、作品が現存せず、かつ一人千首ならざる続歌形式のものであったらしいが、「明題部類抄」に、

千首 前大納言為家卿 中院尊金 出題亭主

とあるもので、催行年時も不明だが、為家の組んだものの故か後世に大きな影響を与えたものなのである。

さて、この牡丹花千首は各伝本の表題および冒頭の署名に「牡丹花」（或は「肖柏」とあるのを信ずる以外、牡丹花肖柏のものという証拠はない。伝本の書写年時も江戸初期の末頃のものが最も古い。元禄期には（恐らく表題と署名とから）肖柏のものとされてきたことは「版」の識語によって明らかである。また歌書類の目録の中でも古い大東急記念文庫「禁裏御蔵書目録」に「千首 宋雅 肖柏 二冊」とあって、（これは万治四年正月禁中炎上の折に焼失した書目を伝えるものだから）江戸初期に恐らく現存の二首並記本が禁裏に存し、既に牡丹花のものとされてきたことが分る。そしてこの千首の作品内容が、後述の肖柏の伝記などと全く矛盾しない点から、まずは肖柏のものとみてよいであろう。

それではこの千首の成立はいつごろであろうか。「畫甲」ほかの

本の、応永廿二年・文明元年の奥書が為尹千首のもので、牡丹花千首とは関わりがない。恐らく大永七年十一月のも為尹千首のものであろう（この年四月に肖柏は没しているから、牡丹花千首のものとしても成立の手がかりにはならない）。

肖柏についてはいうまでもないが（注1参照）、伝について必要な点のみ記しておく、嘉吉三年生。堂上の中院通淳の子、内大臣通秀の弟。文明五年（三十一歳）以前、若くして出家、正宗龍統の命名によって肖柏と号した。そののち宗祇の門に入り、和歌・連歌・王朝古典を学ぶ。文明十六年頃には摂津池田に夢庵を構えていたが、京にいたることも多く、本格的に池田に住したのは長享頃かららしい。この前後から盛んに歌人・連歌師・古典学者として活躍するようになるのだが、永正八年六十九歳の冬、牡丹花と改名した。十五年冬、七十六歳の折、堺に移住、こののち多くの門弟を指導し、大永七年四月四日八十五歳で没した。花・香・酒を愛し（「三愛記」）、牡丹の華麗を好んだ。なお家集の「春夢草」は永正十三年以後まもない頃の成立らしい。以上のことを念頭に置く。

老後歳暮（冬）

599 おもはずよ八十あまりに長らへて暮行としにをくるへしとは

住吉（雑）

952 かしこしな八十の後の老までもたもつれこし住吉の松

これらは題詠による虚構とは思われぬ。肖柏は大永二年八十歳であり、従ってこの千首が今見る形になったのは「八十あまり」、大永三年以後、没する七年四月までのこととみてよくはなからうか。すなわち最晩年のものである。なお「老後懐旧」のように、

題によって老を詠じたものもあるが、そうでなくて「老」を詠んだものがこの千首には多い。すべてがフィクションとは思えない。

暁時鳥(夏)

220 たくひなしや老のね覚のあはれしる友はありとも山郭公

名所浦(雑)

839 老ぬれはあはれこゝろもつきはてぬうらやましきはわかのうちらつる

懐旧非一(雑)

920 いくかへり老の末までなれきつる春と秋を思ひいてにせし

寄霜述懐(雑)

929 ますかゝみあしたにうつすまゆの霜おとろかれしも昔成けり

寄雪述懐(雑)

930 老はてゝみるそかひなきうなひこのまろはしあそふ庭の白雪

これらは老境を素直に反映しているものとみてよくはないか。

すなわちこれらは上記の年時の間に成立したという推測を支えるものとみてよくはないだろうか。

その作品についてであるが、一首一首ごとに完結し、当時としては高い水準のものが多く、例えば適宜眼に触れたものを挙げてみても、

春河(春)

105 霞けりひかりもうすき月の中の桂の里のよるの川音

岡月(秋)

409 はるかにも月出ぬらしかた岡のいさゝ村竹かけそうつるふ
といった平明な表現の中に優美な境地を詠出した佳什が多い。

その特徴は、先に老境の反映ということ述べたが、そのほか

どういふ点があるであろうか。題詠歌であるから、身辺詠とみられるものは少ないが、それでも居住していた堺の庵の周辺を詠じたとみられるものがある。

泊月(秋)

432 こなからもろこし舟のかねの音を枕の上におつる月影

舟月(秋)

449 すむ月にきくそかなしき松浦舟ゆくゑもしらぬよるのかちを
と

など堺住の詠ではなからうか。少なくとも前歌は堺港の景ではないかと思われる。そのような堺の庵居という視点でみると、

花色(春)

151 一木さく草の戸ほそのさくら花うき世の外の色そさひしき

花主(春)

153 とちはつるむくらのかとしほれけりあるしうらむる花の夕

露

籬歎冬(春)

183 ゆきめくるまかきの小蝶まかふなりさける山ふき散みたる比
などは、草庵の生活に材をえたのではなからうか。自在な表現の
内に花を愛する肖柏の氣持が滲み出てくる。

隣月(秋)

447 遠からぬ隣の人もいねかての月にはなひる音きこゆなり

寄竹祝(雑)

994 みの上もなにかおもはん竹のはをすさむる程のゑいのたのし
ひ

前者は庵居生活の中から出てくるユーモア、後者は酒を愛した肖

柏の感懐であらうか。

夕蛙(春)

165 埋水ありとも見えす鳴かはつ夕かけ草に声あまるなり

庵月(秋)

443 かたみにそ月のあはれも知られける庵りならふる秋のね覚に

谷水(冬)

536 谷の戸をたゞくときは朝氷水くむ人のくたく成けり

杣檜(雑)

805 杣木ひくこゑをふもとに送りすて、峯の檜原に残る秋風

庭苔(雑)

813 名もしらぬとりもおちきて庭の面の苔の庭にあさるこゑく

庵居、田園、山里の景情を的確に詠い上げている。

また上にも引いたが(952)、堺に近い住吉の歌が散見する。

松雪(冬)

578 住吉やはま松かえのしたもみちふりもかくさぬけさのうす雪
題詠とみられる名所歌が多いから強引に結びつけることは慎し
むべきだが、かつて住んだ摂津池田周辺の景を詠んだものがみえ
る。

山春(春)

102 春ふかみ霞なはてそ松一木たまさか山にたてる夕くれ

原時鳥(夏)

229 ありま山夕かけふかし時鳥一声なきてみなのふし原

山落葉(冬)

518 色みえて心よはしや木枯を待ちかねやまにもろきもみちは
源氏学者として古典文学の境地を踏えた歌もあると思われるが、

全文翻刻が為されれば識者の指摘があるであらう。

原虫(秋)

360 みや人のこゑの面かけす、虫のみかきか原に残す秋かな
とりあえず右の一首を掲げておく。

禁中月(秋)

436 身をかへてみるよしも哉萩の戸や竹の台の露の上の月

石清水(雑)

942 いはし水やまと鳴ねをおさめこしなかれの末を思はさらめや
前者は中院家出身の氣持を秘め、後者は村上源氏流のプライドを
込めて詠い上げているのではなからうか。

四

上に述べたように、この千首は恐らく大永三年から七年四月ま
でに、今の形にまとめられたものと思われるが、千首歌ほどの位
の時間で詠まれたものであろうか。

従来の個人千首をみると、天授千首における長慶天皇・春宮
(後の後龜山天皇)・関白教頼は、天授二年夏以後「いくばくの日数
もなくてよみいださせ給ふ」(宗良親王跋)というから数ヶ月もた
たぬ内に詠じたいらしい。耕雲は二十日間(いわゆる竹柏園本奥書)。

為尹は一ヶ月半足らず、宋雅は十日間、守武の法楽千首も一ヶ月
半程度(奥書)であった。但しこれらは応製的なもの、貴命、法
楽などの嚴然たる目的があったから短期間に成ったのである。う。
肖柏の場合、具体的な契機は分らないが、八十余歳という高齢で
詠じたのは、生涯の決算、総括としての氣持が基本にあったので
はなからうか。そしてその長い歌歴から、思い立てば、何年もか

かるといふことはなかつたとみてよいのではあるまいか。上例を見ても千首を詠ること自体そう長い時間は要しないのである。それにしても八十余歳という高齢でまとも上げた気力の充実と、高い質を維持した力量とにあらためて敬服されるのである。しかし中世、特に後期における千首和歌の研究は殆ど為されていない。今後の研究の資として牡丹花千首の輪郭を記述してみたのである。

(1) 牡丹花千首については木藤才藏『連歌史論考(下)』に収められた一連の研究があり、なお井上『中世歌壇史の研究』(室町前・後期)も触れ、その後、綿拔豊昭『牡丹花千首年譜稿』(連歌俳諧研究 66, 昭59・1)が出された。ただ、多くは「牡丹花千首」については触れていない。なおこの千首は次に述べるように写本・版本で伝存し、未翻刻である。

(2) 以上の外、『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』11によると、林田良平(蝸牛廬文庫)にもあるように記されているが(肖柏千首の条)、一本は「春夢草」(歌集)の写本、一本は版本であった。また版本の掲出については『国書総目録』を参考にしたが、同書に掲げられている早大本というのは存在しない。版本には後掲の元禄四年山雲子の奥書があるが、『大日本歌書総覧』(中)には、「牡丹花千首 三卷 肖柏 刊本の外題に牡丹花家集とあれど、春夢草とは別なり。林家の奥書あり」とある。葉山之隠士山雲子は坂内真頼という人物の由である(『和学者総覧』)。版本は元禄奥書の数本を見ただけなので、他に林家奥書本というのも存するのだろうか(なお本稿で調査した伝本の内、国文学研究資料館のマイクロフィルム及び紙焼に依ったものがある)。

(3) 拙著『中世歌壇史の研究室町後期』(三一―一頁)で、大永七年十一月の奥書を書いたのは遠忠かもしれぬ、と記したのは誤りであった。この一連の、為尹千首と思われる三つの奥書が付されたのは、

宋雅と為尹とが同時代なので(その点は「島」の奥書が指摘している)、初め宋雅千首に付せられ、何かの事情で宋雅・肖柏の千首が並記されるようになった後、その後ろに置かれたのか。

(4) 但し牡丹花千首は従来と違う題が若干ある。本文的には未だ確定できない前述の恋部の終りの方の歌題がある。他に例示すると次の如くである。冬部548「池千鳥」、549「汀千鳥」は他の同題千首には「池水鳥」「河水鳥」で、これは牡丹花千首の独自題であるが、また雑部908無常三題は多くの先行同題千首が眺望題であるが、「明題部類抄」によると中院亭千首が無常題で、それに依つたらしい。雑部984の「寄地祝」は他の千首は「寄風祝」だが、これも中院亭千首に依つたようだ。雑部971・980は、この同題千首の展開中、地獄界く仏界の系列と、大日一乗の系列とに分れたが(前者は宗良・宋雅等千首、後者は耕雲・為尹等千首)、牡丹花千首は前者に属する。因みに、近刊予定の和歌文学会編の「題」に関する論集に、千首歌に言及する拙文を草する予定である。

付記 本稿は一九九〇年秋、堺市で行われた和学文学会大会において、「中世界における和歌活動」と題して発表したものの一部をまとめたものである。その折お世話になった片桐洋一・竹下豊の両氏、並びに資料収集に当たってさまざまな御教示をえた松野陽一氏に厚く御礼申し上げる。

追記

『思文閣古書目録』第百三十二号(昭二九年十月)に「詠千首和歌一 二冊」が掲出、「江戸前期頃写 文禄五年阿野実頭筆伝写本 飛鳥井宋雅・牡丹花肖柏和歌 阿波国文庫旧蔵 和大 映入」とあって、巻頭・巻末の写真が掲げられていた。端作りは「詠千首和歌上 宋雅 牡丹花」で、二首並記本である。奥書は、応永廿二年十月日、文明元年云々、大永七年十一月瑞光、文禄五年などで、書腰部(五〇・一・八五六)本と同じだが、「文禄五年閏七月十八日 書写之 実頭」と、実頭(阿野実頭)の名がみえる点、注意される。「書甲」と同系の本と思われるが詳細は不明。